

学校現場の状況について

渡邊先生：戸部先生が、養護教諭の先生を対象に実施された調査についてお聞かせください。

戸部先生：3月の時点で、全国の先生方にお声かけしてアンケート調査を行いました。そのときは、懸念に思っていることを中心に回答いただきました。1学期が終わった頃に第2回調査を行い、今度は対策で困っていることや、子どもたちに起こっている問題を中心に調査しました。15ページのアンケートは第2回の調査結果です。

渡邊先生：調査からわかった点などはありますか？

戸部先生：養護教諭が児童の状況について、何を問題と捉えているかを調査したところ、1位は生活習慣の乱れで、約8割の養護教諭が心配だと回答していました。ゲームづけ・ネットづけの生活を送っていたことに対する懸念の声も多く聞こえます。また、心のストレス、学校再開後への不応答が増えてきていることへの懸念の声も、4割～5割程度ありました。

辻野先生：一緒に働く養護教諭からは、太ったり痩せたりといった体型が変化している子どもに対する心配の声が出ています。

学校の衛生管理について

渡邊先生：学校の衛生管理についての指導が文部科学省からもあったと思いますが、養護教諭と現場の先生との連携はどうでしょうか？現場の先生の負担が増えてしまうことについて、反発などあるのではないかと思います。

辻野先生：本校では、管理職から先生方へ指示があり、具体的な実施方法は養護教諭から伝えました。文部科学省や市の教育委員会からの通知もあり、現場は全体として危機感をもっていたので、やりたくないといったマイナスの反応などはなかったです。ですが、7月以降は長期になり陽性者もなく、慣れもあり、「いつまでやるのだろう」という声も出てきてはいます。9月に文部科学省から「学校の新しい生活様式」が出されましたが、そこでは、消毒については清掃中にポイントを絞って消毒すればよいという記載があり、10月から教室ではそのようにしています。ただ、トイレや階段の手すりなど共用部分は、管理職からはもうちょっと様子を見ようという

指示があり、毎日の消毒は続けています。

戸部先生：現場の先生方の間で、対策に一生懸命取り組んでいる人と、そうではない人の温度差など出てきていますか？

辻野先生：学級担任は、掃除のときに消毒をするという明確な指示があったので、それに従っていますが、音楽や英語の専科の授業の先生は、まだまだ心配しながら授業をされている印象です。一斉授業が成り立つ国語や算数と違って、技能や技術教科は接触到配慮せねばならず、いつになったら以前のような授業ができるのか、どんな配慮をしたらいいのかなど、聞かれることもあります。

公表についての考え方

渡邊先生：もし、学校から感染者が出た際に、公表すべきかどうかについての問題があります。明確に学校名を出す学校もあれば出さない学校も。とても難しい問題だと思います。

戸部先生：感染が広がるのを防ぐという観点だと、必要な情報なのかもしれないのですが、社会から守られるかどうか、一番大きいですね。現代の世の中では、ネットから情報が広がってしまいますから。学校や個人が特定されるリスクがあるため、公表についてはかなり慎重にならざるを得ない。学校としては子どもたちや家庭を守ることを第一に考えますからね。

渡邊先生：自治体が学校を守る姿勢を出すことが必要です。学校が再開した当初は出しにくかったかと思いますが、今は社会の風向きも変わってきているのでしょうか。

戸部先生：感染者が出ること自体はやむを得ないという理解があるかもしれないですが、「学校で対策はきちんとできていたか？」という指摘をされたときに説明できるかどうかを学校としては考えますよね。保護者からの要望もあるでしょうし。文部科学省から、そこまでやらなくてもよいと言われても、簡単にはやめられないのが実情です。

辻野先生：先ほどもお話しましたが、やはり、トイレ



戸部秀之先生

や手すりなどの共用部分の消毒は毎日続けています。また、音楽室や英会話の教室など、コミュニケーションをとりながら授業を行う教室、いろんな学年の児童が使用する教室の先生は、とても気を遣っています。消毒などの対策をやめたとたんに感染者が出てしまったら…、とか、クラスターになってしまったら…という不安は常にあります。ここまで続けてきていたのにと、後悔することになりかねませんから。

渡邊先生：冬が近づいてきて、他の感染症の流行も気になりますよね。

辻野先生：そうですね。通常なら、インフルエンザが流行してくる時期にさしかかりました。気になっているのは、寒くなることで対策がおろそかになってきていないかという点です。わかりやすいのが、手洗いのせっけんの消費です。本校は大規模校ではあるのですが、学校再開後はせっけんの消費がすごく多くて、10日で100個ほど使用されていました。ところが、最近寒くなってきたら、消費が減ってきています。換気についても、寒いと少なくなりがちです。子どもたちが、自分で意志をもって続けてくれるように、工夫をしたいと考えています。

「新しい生活様式」への指導について

渡邊先生：文部科学省から、「新しい生活様式」が出されましたが、実際に学校ではどのような指導がされていますでしょうか。

辻野先生：マスクについては、運動のときは外していますが、教室で勉強するときは、やはり顔を近づけて会話したりすることをとめられないので、マスク着用で授業をしています。ただ、マスクの紐がのびていたり、鼻が出ていたり、口の半分が出ていたりする児童をよく見かけます。全校集会などはビデオで行っており、密になることは避けていますね。

渡邊先生：私も先日実習校に伺ったのですが、低学年の児童にマスクの正しい使用方法を徹底するのは難しいと感じました。ただ、全国的に、学校でクラスター

が発生した事例はあまり多くないように思います。手洗いの効果があるかもしれませんが、今回はっきりしたことは、インフルエンザの発生が少ないことをみても、基本の感染症対策に一定の効果があるという事です。やはり会話の際には距離を保つこと、マスクをすること、大きな声を出さないことは重要なので、しっかり指導をする必要があります。

戸部先生：子どもたちは、休み時間はどのように過ごしていますか？密になるのもしかたないかと思うのですが、先生から指導はあったりするのでしょうか？

辻野先生：休み時間の外遊びは以前と変わらずにやっているような印象です。授業中にくっついて話していると「そこ密だよ！」と先生が伝えて、さっと離れるといった光景を見かけたりしています。休み時間中というよりも、休み時間が終わったあとに、きちんと手洗いがいをしてから教室に入るというほうに気を付けていますね。

戸部先生：授業中に話し合いの活動などはされているのでしょうか？

辻野先生：担任の先生方の話を聞いていると、「対話的で深い学びは密。」という声を聞いたことはあります。どうしたらよいか、工夫が必要ですね。1つの方法としては、PCやタブレットの活用が挙げられるかと思います。本校でもタブレットが配布され、PCルーム以外に6クラス配布され、算数や理科の学習で使っています。話し合い活動は、タブレット上でのやりとりにシフトしていくのかな、と感じるところではあります。

戸部先生：子どもたちの視力については、どうですか？

辻野先生：本校は、もともと視力が低い子がとても多いです。高学年では、視力が0.3未満の児童が、全国平均と比較して倍くらいいます。メガネをかけている子も多いです。タブレット学習が増えて、家庭でのPC等の使用も増えている現状を見ると、とても心配です。視力が低下しても、メガネをかければよいというのではすまないような気がしています。タブレットを使用する際に、目の体操をすることや目を休めることの大切さを伝えるなど、工夫をしたいところです。



渡邊正樹先生



辻野智香先生

